



上五島神楽

桂神楽

遠山の霜月祭

中之又神楽

九州の神楽

シンポジウム 2020

KYUSHU NO KAGURA SYMPOSIUM

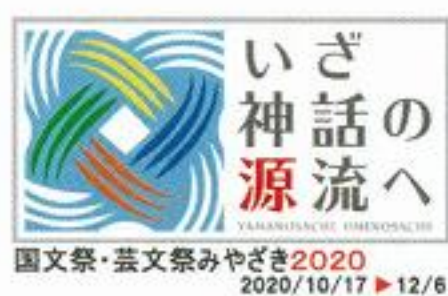
令和2年1月18日(土) 19日(日) 13:00~17:00
メディキット県民文化センター演劇ホール

神話の源流へ。

ここは、
神様だけの
秘密の場所。



延岡市・神さん山



第35回 国民文化祭・みやざき2020
第20回 全国障害者芸術・文化祭みやざき大会
2020年10月17日(土)~2020年12月6日(日)
「山の幸 海の幸 いざ神話の源流へ」



公式ホームページ
国文祭・芸文祭
みやざき2020



Facebook
神話のふるさと
みやざき



〈第1日〉1月18日(土)

13:00 神楽公演

上五島神楽(上五島神楽保存会、長崎県新上五島町)

14:05 基調講演「稲作、狩猟の祈願・祈禱としての神楽」

国立歴史民俗博物館教授 松尾 恒一氏

14:45 休 憩

15:00 パネルディスカッション

コーディネーター 國學院大學教授 小川 直之氏

パネリスト 別府大学教授 段上 達雄氏

熊本大学名誉教授 安田 宗生氏

長崎県文化財保護審議会副会長 立平 進 氏

宮崎民俗学会会長 前田 博仁氏

飯田市美術博物館専門研究員 櫻井 弘人氏

17:00 終演



〈第2日〉1月19日(日)

13:00 基調講演「日向神楽の伝承土壌」

近畿大学名誉教授 野本 寛一氏

13:50 神楽公演〈前半〉

遠山の霜月祭(長野県飯田市)

14:50 休 憩

15:05 神楽公演〈後半〉

中之又神楽(宮崎県木城町)

桂神楽(宮崎県諸塚村)

17:00 終演



〈第1日〉 1月18日(土)

神楽公演

上五島神楽(上五島神楽保存会、長崎県新上五島町)

長崎県五島列島の新上五島町で伝承される神楽で地元の各神社の祭礼などで奉納されている。室町時代末期に神楽の原型ができ、江戸時代中期に現在の神楽舞に整ったとされ400年以上の伝統がある。舞は畳2枚分の板張りの上で繰り広げられ、大太鼓・小太鼓の激しいリズムに乗った躍動的な舞など全三十番で構成されている。平成28年国重要無形民俗文化財指定。

《演目解説》

「六將軍」

將軍の武勇を称え、出陣にあたって必勝と武運を祈る舞。

「將軍舞」

將軍誕生の由来とその武勇を語り、天下泰平を祈る舞。將軍は左手の弓を突き立て、右手の開扇を高く振りかざしては振り下ろす所作を繰り返しながら、唱文を唱えるうち、神がかりして次第に飛び跳ねる。最後は抱き役が出て將軍を舞どころの外へ連れ出して終る。

「注連舞」(しめまい)

天照大御神が天の岩戸から御出現なされたとき、注連縄を岩戸の前に張り巡らした様子を表した舞で、注連の謂れを解説している。

「獅子舞」

最後を締めくくる舞で、獅子と天狗による悪魔祓いの舞。



將軍舞

シンポジウム

「神楽と豊穰祈願」

宮崎県の神楽には、高千穂の夜神楽の翁と媼が酒を醸す「御神体」、銀鏡神楽や村所神楽の「シトギリ」、潮嶽神楽の「魚釣り舞」など、稲作や狩猟、漁撈等の豊穰祈願を表現している演目が顕著にみられます。こうした演目は大分県の御嶽神楽「五穀舞」、長崎県の壱岐神楽「豊年舞」「漁舞」にもみられ、愛知県・静岡県・長野県の県境地域の神楽でも五穀豊穰や再生を願う演目があります。

豊穰祈願の表現を演目に含む神楽は宮崎県に広く伝えられていますが、九州各県ではどのようになっているのか、三河・遠江・南信州の地域との比較も行いながらその実態を明らかにしていきます。

基調講演

「稲作、狩猟の祈願・祈禱としての神楽」

松尾 恒一氏(国立歴史民俗博物館教授)

1963年東京都生まれ。國學院大學大学院博士課程修了。博士(文学)。国立劇場民俗芸能・琉球舞踊専門委員。民俗宗教、特に中国起源の仏教、陰陽思想の日本における受容と伝承を追及している。『日本の民俗宗教』(筑摩書房)、『日本の祭り 大図鑑』全4巻(ミネルヴァ書房)、『物部の民俗といざなぎ流』(吉川弘文館)、『儀礼から芸能へ 狂騒・憑依・道化』(角川学芸出版)、等。第三回国際媽祖文化学術シンポジウム優秀論文賞(中国福建省、2018年)など受賞。



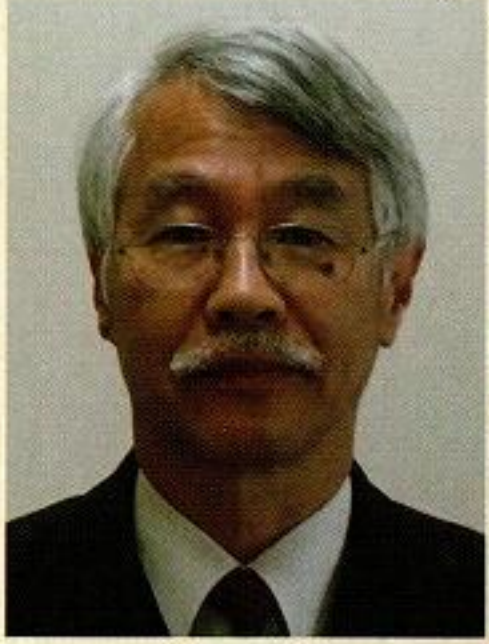
パネルディスカッション



コーディネーター

小川 直之氏(國學院大學教授)

1953年神奈川県生まれ。國學院大學文学部文学科卒業。専門は「民俗学」。文部科学省文化審議会専門委員、無形文化遺産保護条約に関する特別委員会委員などを歴任。現在は、宮崎県のみやざきの神楽魅力発信委員会委員長、神楽保存・継承実行委員会委員長として、みやざきの神楽の保存継承や魅力発信にも携わる。その他、柳田國男記念伊那民俗学研究所所長、独立行政法人日本芸術文化振興会の委員や中国の南開大学、インドのジャワハルラル・ネルー大学の客員教授などを務める。



パネリスト

段上 達雄氏(別府大学教授)

1952年大阪府生まれ。武蔵野美術大学造形学部卒、同大学大学院修士課程造形研究学科修了。同大学助手。在学中に民俗学者宮本常一教授に師事。宮本先生主催日本観光文化研究所同人。大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館(現大分県立歴史博物館)主任研究員を経て、文化庁文化財保護部伝統文化課文化財調査官。現在、別府大学文学部史学・文化財学科教授。別府大学附属博物館長・学長補佐(教務)。その他、文化庁文化審議会専門委員、福岡県・長崎県文化財保護審議会委員などを務める。



パネリスト

安田 宗生氏(熊本大学名誉教授)

1944年福岡県生まれ。東京教育大学大学院文学研究科博士課程日本史学専攻(史学方法論)修了。1975年熊本県教育庁文化課学芸員。1980年熊本大学文学部講師を経て、1999年教授、2010年熊本大学退職後、名誉教授となる。代表的な著書に『肥後の琵琶師－近世から近代への変遷－』(三弥井書店)、『国家と大衆芸能 軍事講談美當－調の軌跡』(三弥井書店)他



パネリスト

立平 進氏(長崎県文化財保護審議会副会長)

1949年大分県生まれ。國學院大學文学部史学科卒業。長崎県立美術博物館学芸専門員(学芸員)を経て、国立水産大学校教授。2000年長崎国際大学教授、同大学院教授。2015年3月同大学退職。豊後大野市清川町の御嶽流神楽の国指定のための調査研究や、中津市の神楽・祇園祭などの県指定のための調査などを手掛ける。世界文化遺産関係の長崎県五か所、熊本県一か所の重要文化的景観調査に従事、委員・委員長を務める。



パネリスト

前田 博仁氏(宮崎民俗学会会長)

1942年宮崎県生まれ。宮崎大学学芸学部卒。宮崎県内小学校、宮崎県総合博物館、宮崎県教育庁文化課、宮崎県立図書館での勤務を経て、宮崎市立生目台西小校長などを歴任。宮崎県内民俗芸能の調査、修験道や一向宗禁制、六十六部など庶民信仰の調査研究を行う。現在、宮崎民俗学会会長、宮崎県立博物館協議会会長、みやざきの神楽魅力発信委員会副委員長。著書として、『薩摩かくれ念仏と日向～一向宗禁制と六十六部～』(鉾脈社)、『近世日向の仏師たち』(鉾脈社)、『近世日向の修験道』(鉾脈社)他がある。



パネリスト

櫻井 弘人氏(飯田市美術博物館専門研究員、國學院大學兼任講師)

1959年長野県飯田市遠山生まれ。國學院大學文学部神道学科を卒業後、飯田市美術博物館に学芸員として勤務。南信州を中心に、三遠南信の霜月神楽・オコナイ・人形芝居・獅子舞・煙火・年中行事などを調査。遠山の霜月祭りをはじめ天龍村の霜月神楽、新野の雪祭りなどの報告書や記録映像をまとめる。2012年に民俗芸能学会の「本田安次賞特別賞」を受賞する。柳田國男記念伊那民俗学研究所等に所属する。



〈第2日〉 1月19日(日)

基調講演



「日向神楽の伝承土壌」

野本 寛一氏(近畿大学名誉教授)

1937年静岡県生まれ。國學院大學文学部文学科卒業・文学博士(筑波大学)。

著書『生態民俗学序説』『海岸環境民俗論』(白水社)『枳と餅・食の民俗構造を探る』(岩波書店)『山地母源論・日向山峡のムラから』(岩田書院)等。2015年文化功労者・2017年瑞宝重光章。

神楽公演

遠山の霜月祭(上村遠山霜月祭保存会、長野県飯田市)

長野県飯田市遠山郷の各集落で伝承されており、毎年12月(旧暦の霜月)に行われる霜月神楽であり、新たな一年の息災を願う祭りである。この祭りの起こりは地元の伝承では平安時代の終わりとも鎌倉時代ともいわれている。後に、徳川幕府に改易された遠山氏一族を「八社の神」として合祀している。社殿内に土製の竈(かまど)を設けて湯釜2口を据え、その周りで神事や湯立、さまざまな舞を行う。15立くり返される湯立のあと、夜明け近くに17の面(おもて)が登場する。昭和54年国重要無形民俗文化財指定。

《演目解説》

「湯立(ゆだて)」

祭りの中心となる演目。湯立は本祭り約18時間のうちの10時間、延々と繰り返される。遠山の霜月祭は複数の神事を同時進行するという特徴があったが、今では今日出演する地区(上村上町の正八幡宮)だけとなっている。湯立の途中に「大宮清め」という祭りの場所すべてを清める神事と、「上げ湯」という神々に湯を献ずる神事を同時に行う。

「四面(よおもて)」

水、土、火、木の神をかたどった四つの面を「四面」と呼ぶ。水と土の神が登場し、煮えたぎった釜の湯を素手で跳ね飛ばし、氏子に浴びせる。湯をはねた後は、氏子に囃立てられて、氏子の中へ飛び込んでいく。

「八社の神(はっしゃのかみ)」

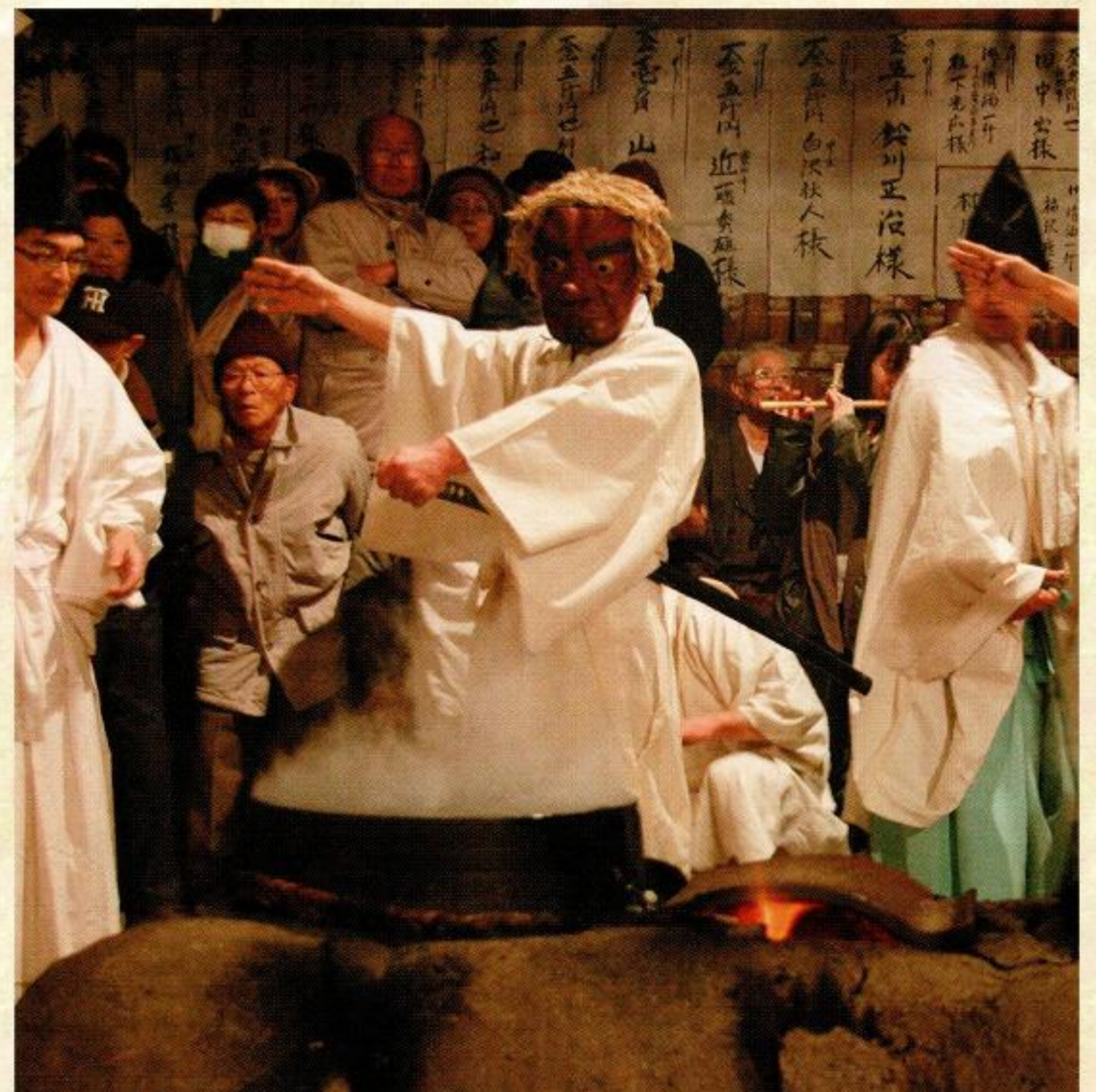
この祭りが行われる地域を「遠山」という。この地を治め、のちに徳川幕府に改易された遠山氏一族の霊を慰めるために祀ったためか、静かな舞となる。

「禊の舞」

舞の中で最も花形となる演目で、扇と鈴を持って、「道行」「五方」「お山」「ひじ掛け」「ちらし」と舞い方を変化させて舞う。その後、扇を刀に持ち変えて、「お山」「ひじ掛け」「飛び切り」「腰掛け」「輪くぐり」「ちらし」と舞い方を変化させて舞う。

「富士天伯(ふじてんぱく)」

富士天伯とは金王、猿田彦の神といわれ、すべてを統合する遠山地方で最も信仰の厚い神。錦織りの狩衣に弓と鏑矢を持って舞う。弓と鏑矢は、桃の木の弓にヨモギの鏑矢とされている。「道行き」「五方」「天地」と舞い方を変え、矢を放って悪鬼外道を追い払う。



中之又神楽(中之又神楽保存会、宮崎県木城町)

中之又神楽は米良系神楽の一つで、木城町の中之又鎮守神社で伝承されており、遅くとも江戸中期にはほぼ現状に近い形で奉納されていたといわれる。

中之又神楽をはじめとする米良系神楽は、鎮守社や摂社の神々が次々に登場することが特徴で、神体出現の神楽ともいわれ、番付の中でも土地神が出座する演目が重要とされている。また、狩猟習俗を表現する演目があることも特徴である。平成29年国選択無形民俗文化財(米良山の神楽)。

《演目解説》

『獅子舞』

獅子舞の獅子は猪を表わし山神への感謝の舞とされる。雌雄一对の獅子は、四方と中央を回って拝み、ニタズリを表わす動き(畳の床に腹ばいになり体を回転させる)を見せた後、身震いをして立ち上がり御神屋(みこや)を出る。御神屋を出ることを「櫛の実拾いに行く」と呼ぶ。昔は、獅子舞役の2人が櫛の実拾いの途中で素人に代わることがあった。

『獅子とり荒神』

猪の習性を知り尽くした荒神が猪狩りの作法を教える舞とされ、舞手は被り笠に荒神面を着け、白張の上に千早を着用。片襷を掛け、腰に白弊を下げた榊柴を差した荒神が、ツエンボ(荒神杖)を持って舞う。後半、櫛の実拾いから戻った獅子と共に舞う。ツエンボで2頭の動きを制したり狙い撃ちする「デンギ」の動き、片襷を両襷に変え、手にしていたツエンボを腰に差し、素手で(右手で雄、左手で雌)つかんで舞う。



獅子とり荒神

桂神楽(桂神楽保存会、宮崎県諸塚村)

諸塚村に伝承される神楽で、「諸塚神楽」の一つ。祈願成就の時だけ奉納されるため不定期で開催される。諸塚神楽にはほかに類のない200体を越す神楽面が代々伝えられており、天照大神や手力男神などの神話の英雄だけではなく、山の神や水神など土地由来の神々も登場するのが特徴。御神屋の外から歌をかけたり、はやしたてる「神楽ぜき」や神楽宿周辺の民家が持ち回りで来賓や観客をもてなす「脇宿」といった独特な文化を持つ。平成5年国選択無形民俗文化財(諸塚神楽)。

《演目解説》

『荒神の言い句(問答神楽)』

夜中の荒神とも竈荒神ともいわれ、夜神楽の賄いの煮炊きをする竈から二対の榊しぼに乗った荒神が「エイサー、エイサー」の掛け声とともに御神屋になだれ込む。その後、神主と荒神による問答が始まる。最後は折り合いが付き、舞入れる。

日々かまどの火を使うことへの感謝の意があり、古くから地主荒神、かまど荒神は大事にされてきた。

『みかさ神楽』

桂神楽の中でも独特な舞の演目で、太鼓の調子も独特なものになる。早乙女に扮した舞手が稲作の様子を舞で表現した神楽。



荒神の言い句

夜神楽開催情報

桂大神楽

日程:令和2年2月15日(土)~16日(日)

場所:諸塚神社

